



浄火

クワ  
バラ・ゼミ  
一同



# 目次





其ノ一「谷崎氏をはじめとする同時代の文壇の文学観」

昭和二年、芥川龍之介と谷崎潤一郎との間で小説の筋(以下シナリオと表記)論争が起きた。「シナリオの面白さ」、「通俗性」という概念を「エントメ」という言葉で表し、「純粹」「詩的精神」という概念を「芸術」という言葉で表し、「谷崎潤一郎は小説における芸術性は肯定しているが、小説は大眾を対象としているのでやはり通俗性を捨てるわけにはいかない」という主張をしている。

「俗人にもわかる筋の面白さ」と云ふ言葉もあるが、小説は多數の讀者を相手とする以上、それで一行差し支えない。芸術的価値さへ変わらなければ、俗人に分らないものよりはわかるものの方がいい。妥協的気分でない限り、通俗を難度するなど云ふ久米君の説(文芸春秋 2 月号)に私は賛成だ。」

それに対して、芥川の文学観はシナリオの重要性つまり通俗的なもの的重要性は認めつつも、詩的精神や純粹性といった芸術的側面を第一に考へることが必要だと言っている。

「僕は谷崎氏の用フル材料には少しも異存を持ってゐない。(中略)僕が僕自身を鞭打つとともに谷崎氏をも鞭打ちたいのは(中略)その材料を生かすための詩的精神の如何である。或は又詩的精神の深淺である。」

この主張だけを見ると、芥川も谷崎も芸術性を小説において最も大事に考え、その中にエンタメ性(通俗性)が含まれることは肯定しているように読み取れる。谷崎氏の主張に関してはその理解で構わないのだが、ここでの芥川の言葉は別の芥川の言葉と矛盾している。その矛盾している言葉を取り上げる前に他の指摘を取り上げておく。

其ノ二「芥川が価値を見出したもの」

芥川にとつての「純粹」と「雑駁」という概念について簡単に言及しておく。純粹とは「通俗的興味のないこと」である。一方、「作品の中にあらゆるものを抛つこと」は雑駁である。作中において、「純粹」は時代を経ても変わらない側面である。それに対して「雑駁」というのは様々な時代の要素を取り入れて、作品に反映させるのでその時代の讀者からは人気を得ることができるとは言えるが、「純粹」のように時代を超越することはない。つまり、純文学は時代を超越するという側面を持っているので「時代と関わらないからこそ、どの時代にも左右されず、作品としての価値が長く生き延びる。」という性質を持っているのである。芥川はそんな純文学の不朽の価値に惹かれた。

其ノ三 「抒情詩的精神」という言葉を正しく理解する」

最後に芥川という抒情詩的なものは何か、ということを中心として捉えていきたい。佐藤春夫が作家の抒情詩的精神と芥川の抒情詩的精神に対する認識の齟齬について指摘して、芥川の抒情詩的精神を説明していた。

「詩が主観を支配するのが詩的精神であり、主観が詩を超越して描くものが散文精神」というのが佐藤春夫の詩に対する認識である。詳しく説明すると、詩というものは本来、決まりがあつてその中で言葉を紡ぐものだ。本来、抒情詩というのはそれを指している。そして、散文精神というのは混沌とする世の中をそのまま決まりに縛られることなく、詩に昇華させたものである。というのが前述した言葉の説明である。

一方、芥川という抒情詩的精神とは主観の表出を小説に落とし込むという意味合いであつて、何か決まりの中で言葉を紡ごうとするものではない。また、芥川という抒情詩的精神とは唯心論的なものに近い。(唯心論とは、あらゆるものに霊的なものを存在を感じるアニミズム思想に近いものとしてここでは考えて良い)

僕はもう十数年前、或山中の宿に鹿の声を聞き、何かしみじみと人恋しさを感じた。あらゆる抒情詩はこの鹿の声に、——雌を呼ぶ雄の聲に発したのであらう。しかしこの唯物美字は俳人は勿論、遠い昔の歌人さえ知つてゐたかもしれない。

僕の詩的精神とは最も広い意味の抒情詩である。(中略)どう云ふ思想も文芸上の作品の中に盛れる以上、必ずこの詩的精神の浄火を通つて来なければならぬ。僕の言ふのはその浄火を如何に燃え立たせるかと云ふことである。それは或いは半ば以上、天賦の才能によるものかもしれない。いや、精進の力などは存外効かないものであらう。しかしその浄火の熱の高低は直ちに或作品の価値の高低を定めるのである。

先行研究における結論

あらゆる文芸の形式中、小説ほど一時代の生活を表現できるものはない。(『小説真髓』)といわれているように、詩や絵のように制約がほとんどないから同時に又、一面では生活様式の変化とともに小説ほど力を失ふものはない。(中略)誰も真実の溢れた数行の文章を読むために、数百頁を読破する根気のある者はないに違ひない。この素朴な心持ちを切実に表現したもののだけ、時代を超えたと云うことは、即ち、抒情詩の生命が小説よりも長い所以である。

この文章「通俗文学の中に、稀に数行の詩的要素が含まれても、通俗的価値の喪失によつて、それを手に取る人はいないと芥川は懸念している。」という主張を読みとれる。

ことわつておくが、小説において詩的精神の重要性は芥川だけでなく、他の同時代の文壇も指摘している。(谷崎氏もその一人である。)それらと芥川の根本的な違いは通俗性(エンタメ)を徹底的に排除するところにある。

目次

はじめに芥川の文学観 .....	4
大学生四人が美しさについて話してみた	
前編 .....	8
後編 .....	22
座談会を終えて .....	30
ゼミメンバー創作 .....	32





## 大学生四人が話してみた

【前編】あなたにとっての美しい文章とは

「文学とは？」という壮大なテーマのもと、様々な作品に触れてきた私たち。さやわか『文学の読み方』を通して、それぞれの考えを話し合ってきました。そのある回で一つの疑問が生じます。

「美しい文章」とは。

そして今回「うまい作品」「美しい文章」について語らうことに。  
まずは自分が美しいと思う文章を持ち寄ることになるのですが……。

参加メンバー

小島諒太

佐藤也於

羽田敬史

古川美優歩（後半から参加）

川端康成『伊豆の踊子』

私はそれを見ていたのだった。この美しく光る黒眼がちの大きい眼は踊子の一番美しい持ちものだった。二重線の線が言いようなく綺麗だった。それから彼女は花のように笑うだった。花のように笑うと言葉が彼女にはほんとうだった。

仄暗い湯殿の奥から、突然裸の女が走り出してきたかと思うと、脱衣所の突鼻に川岸へ飛び下りそうな恰好で立ち、両手を一ぱいに何かを叫んでいる。手拭いもない真裸だ。それが踊子だった。若桐のように足のよく伸びた白い裸身を眺めて、私は心に清水を感じ、ほうっと深い息を吐いてから、ことごとく笑った。子供なんだ。私達を見つけた喜びで真裸のまま光の中に飛び出し、爪先きで背一ぱいに伸び上がるほどに子供なんだ。私は朗らかな喜びでことごとく笑い続けた。頭が拭われたように澄んで来た。微笑がいつまでもとまらなかつた。

村上龍『限りなく透明に近いブルー』

目を刺すネオンサインや体を真二つに引き裂く対向車のヘッドライト、巨大な水鳥の叫び声そっくりの音で追い抜いていくトラック、突然立ちふさがる大木や誰も住んでいない道端の壊れた家、わけのわからない機械が並び煙突から炎を噴き上げる工場、鎔鉱炉から流れ出る液体の鉄に見える曲がりくねった道路。生き物のように鳴きながらうねる暗い河、道路の脇に生えた踊っているように風で揺れる背の高い草、有刺鉄線に囲まれた踊っているように震えている変電所、そして狂ったように笑いつづけているリリーとそれを見ている僕。すべて自ら発光している。雨で増幅されて光が作り出す影は、眠っている家々の白い壁に青白く伸び、怪物が一瞬葉を剥き出すように僕達を驚かせる。

佐藤..はい、ではじゃあ行きますね。え〜と最初の文章は割とテンポのいい感じなんですけど、上手く、なんだろう……。比喩的な表現をどう使うところか、一つ目の特徴かなと思つて、それと割と後一つ一つの文章を短くすることでテンポが良いというのが一つの魅力かなと思います。

二つ目はこれは踊子の描写なんですけど、踊子がどういう綺麗、どういう美しさ、どういうような感じなのかを表現している、美しいものかどうかという美しい文章で表現するのとかという所に魅力を感じて、あと自分の感情をそのまま表現するのではなくて、何だろうこう、意味というのを持たずことで、持たずことの面白さみたいなのところがう〜ん、良いかなと思ひました。次の文章は授業でも取り扱ったものなんですけど、これは割とこう一つの描写、一つの描写の連続なんですけど、ただ目を見て、目を開いてみるとほんとすごい無数の情報が入ってくると思うんですけど、それをそれの中で、何を切り取って何を描写するのかに加えてどう描写するのかというのがすごい描く側の能力が発揮されるのかなと思ひます。それが上手く、上手くというか、個人的にはすごい刺さったので、そこを選びました。以上です。どうしますか。お二人から何かあれば。

小島..はい、そうですね、自分が美しいと思つたのと比べて結構佐藤くんのは長文というか長い目線で切り取つたものが美しいと感じるんやなと思つて、まあその感じ方の違いとかも思ひましたし、テンポというのやっぱ、大事なんかなと思ひました。

羽田..そうですね。え〜と、例えば、一つ目の伊豆の踊子のやつなんですけど、え〜と、二行目あたりからですね。「それから彼女は花のように笑うだけだった。」という部分なんですけど、この花つていうのをなんているのかな、あえて薔薇とかチューリップみたいな感じで具体化させないで抽象化させて、読者がそれぞれ感じられるような表現しているのはうまいなと思ひましたね。流石という感じで、やっぱり全体的にあの描写を出

来るだけ正確に伝えるためなのか、わからへんけど、え〜と、比喩表現とかそういうものが良く使われているんだというのが以上の三つの文章を見ての共通を感じ取りましたね。それと結構なんでいうんですね、速読というか結構さらっと読んだんですけど、さらっと読んでも内容がすんなり入ってくるような文章でした。以上です。

はい、では次の方行きますか。

羽田..小島くんのやつでもいいですか。お願いします。

小島..はい、大丈夫です。

伊坂幸太郎『砂漠』

その気になればね、砂漠に雪を降らすことだって、余裕でできるんですよ。

森博嗣『すべてがFになる』

「眠ることの心地良さって不思議です。何故、私たちの意識は、意識を失うことを望むのでしょうか？ 意識がなくなることが、正常だからではないですか？ 眠っているのを起こされるのって不快ではありませんか？ 覚醒は本能的に不快なものです。」

「死刑って、いつ執行されるのか教えてくれるのかしら？ 私、自分が死ぬ日をカレンダーに書きたいわ……。こんな贅沢なスケジュールって、他にあるかしら？」

「どうして、ご自分で……。その……。自殺されないのですか？」

「たぶん、他の方に殺されたいのね……」

四季はうっとりとした表情で遠くを見た。

「自分の人生を他人に干渉してもらいたくない、それが、愛されたい、という言葉の意味ではありませんか？」

金城一紀『レヴォロリージョンN.O. 3』

「おまえはタフな人生を送るかもしれない。傷ついてダウンすることもあるだろう。でも……。なにがあっても踊り続けるんだ。」

RADWINPS『ドリーマーズ・ハイ』

悲しみに優しさ足すと平和に  
平和に痛みを足すと怒りに  
怒りに温もりを足すと涙に  
涙に涙足すとカラカラに

その声に心を足すと言葉に  
言葉に愛を足すとたちまちに  
すべてを足して僕たちで  
割れば世界に

綿谷りさ『蹴りたい背中』

さびしさは鳴る。

小島..はい、えーと、じゃあ一番上のとこですね。  
まあもう一文なんて読んじやおうかなと思います。

「その気になればね、砂漠に雪を降らすことだって、余裕でできるんですよ。」

という文章なんですけど。伊坂幸太郎さんの『砂漠』から引用してきました。その小説の中でも町の中にいて一生懸命砂漠のことを考えるのが君たちの仕事というようなセリフが出てくるんですけど、たぶん僕が受け取ったんですけど、この小説では砂漠という言葉が何度も出てくるんですけど、砂漠っていうのは乾ききったように感じる社会のことを学生視点から皮肉を込めて呼んでいるのかなと思いました。四人ぐらいの大学生が出てきて、砂漠、砂漠って何回も連呼されるんですけど、僕がこの文章を美しいと思っただ理由は砂漠に雪を降らすなんて不可能やけどそれをストレートに表現している所とこの小説においての砂漠＝社会、まあ砂漠に雪を降らすというのは僕達なら社会を変えていけるんじゃないかというなんか純粹な希望を感じて二重のメッセージになってるんじゃないかと思ってそこが美しいと思ってそこを選びました。じゃあ二つ目のがちよつと長いので読み終わったら教えてください。

佐藤..読めました。

羽田..読めました。

小島..はい、ありがとうございます。えーこれ森博嗣さんの『すべてがFになる』からとってきた四季という科学者の言葉なんですけど、この小説の設定というかキャラの設定って人間は死んでいる方が正常で生きている方が不自然という考えを持っている登場人物で、生と死についての文章

ってたくさんあると思うんですけど、生きている方がおかしい、不自然という考え方を文章でなかなかないかなと思って、この一部分だけ取ってもちよつとわかりづらいかもしれないんですけど、ここ一番それを表しているなと思って取ってきました。  
三つ目が

「なにがあっても踊り続けるんだ」

というところなんですけど、これはいたって普通の表現やし、なんか普通の言葉なんですけど、金城一紀さんの本からとってきた。まあ別になんてことない表現なんですけど、踊り続けるというのが作中で紹介される村人のことを指してて、そのなんか村人が男の人かなんかなんですけど、なんか生まれてから死ぬまであいつは踊り、寝ても覚めても食わず飲まずで踊り続けたみたいなのが伝説を持って何が言いたかったら死ぬまで何かを成し遂げることがどれだけ難しいかみたいな感じで作中では使われているんですけど、でこのように普通のフレーズであっても小説内で意味を持たせて、何回も何回も反芻させることによって美しい表現に昇華されるのではないかと僕は考えました。またこの美しいって思う表現はたぶんその作品を一個読まないと伝わらないんですけど、まあでも普通の言葉でさえも美しい言葉になりえるんじゃないかっていう発想で書いてみました。  
四つ目がまた読み終わったらお願いします。

羽田&佐藤..オッケーです。

小島..はい。これは本じゃなくてなんか歌詞から一個ぐらい取ってきてもいいかなってRADWIMPSっていうバンドから取ってきました

た。これは何が美しいかっていうのは自分の中ではあんまりわかって羽田..羽田..ありがとうございます(笑)以上です。  
いんでですけど、シンプルに美しいなと思ってんで取り上げてみました。  
何か足すとか割るとか数学っぽさと感情がかかけ合わさっていいいな  
という風に思ってたんで取ってきました。

「さびしさは鳴る」

なんでですけど、綿谷りささんやっただかな「蹴りたい背中」から。たった一  
言やのに僕は衝撃が走りました。そのさびしさは感じるという風に描く  
んじやなくて、聴覚とか聞こえるように表現するのが美しいと思いまし  
た。で、これを美しいと思った理由はその「さびしさは」の後に誰もが予  
想できなかったであろう文章、予想外の文章が来たのでこれを美しいと  
思いました。僕が美しいと思った文章は以上です。

羽田..ありがとうございます。えいとさっきの佐藤さんの伊豆の  
踊子とかがなんというかな、その文章自体の構造的美しさみたいな、ち  
よつと、まあさっき見た通りなんですけど、そういう部分をすごく感じ  
たんですけど、今回の小島くんのやつは例えば、「すべてがFになる」の  
やつもそうですけどなんか読者が共感するような文章を書かれていてそ  
うゆうなんと言いうかな、真理じゃないですけど、共感性を生むような文  
章もまあそれもまた上手いのかなという印象は持ちましたね。上手いそ  
うかな、はい。最後のRADWIMPSのやつなんですけど、これは共  
感とかさっきの佐藤くんのやつたやつの構造的美しさみたいなやつとは  
また違って、あの手純に上手いというか、これを構造的美しさで捉え  
ていいのかどうかというのとはちよつと自分でも曖昧な感じになってるん  
ですけど、まあまあまあそういう風には個人的には分類できたかなって  
いう感じですよ。(伝わりましたかね(笑))

佐藤..はい(笑)

羽田..ありがとうございます(笑)以上です。  
佐藤..えいと、何だろう。うーん割とこう全体、小説全体を通してその言

葉の意味とかで。だから例えば、砂漠II社会の描写、比喻であつ  
たりとかそういう小説全体を通して言葉に意味を持たせるという  
点を挙げられているというのが面白いかなと思えました。で、  
歌手、歌詞って小説なんかよりも短くて、すごい短い言葉で伝え  
るっていう点では割とこう詩とかの強みで割とこうなんというん  
ですか、純粹と雑駁でしたっけ、に比べて純粹なものだけを集め  
たようなものかなと思うんで、そういうところから引用してくるの  
はあくなんだろうそういうところから引用してくるのは割  
と伝えたいものだけを抽出して誰でしたっけ、RADWIMPSさんが伝  
えたいものだけを抽出して感じる感じがあるので濃度が濃いつてい  
点では美しい文章の一つなのかなと思います。でさびしさは鳴る  
つていうすごい、さびしさって聞けば感じるとかってそうだと  
思うんですけど、そういうものにこれは小説を読めば、これが何で  
鳴るになるのかというのがどういう意味なのかっていうのはわか  
つてくると思うんですけど、そういうところを切取れば、何でこ  
うなんだろうっていうの何ですけど、文章読めばわか  
つてくるつていうところにもその全体を通して、全体を読んだか  
らこそこの言葉が響く何かがあるんじゃないかなと思うんで、一  
つ一つ計算されてるつていう点ではすごく面白いなつて思いまし  
た。以上です。

はい、じゃあ羽田さんお願いします。

文野瑛 『一般野良猫がナンで優勝するだけの配信』より

お風呂場のマットに乗ってさ、空を飛ぶ夢を見たの。私だけ上手くって、みんなにめっちゃめっちゃ褒められてさ、なんか「自分本気で空飛べるように練習しよう！」ってさ、そういう嬉しい夢を見たんだけど、ちょっと中断されちゃったから、仕方なくナンを作ることにしたんだ。

いつもね、ここの辺を散歩してるんだけど、この散歩してるところにある公園みたいなのがあるんだよね。その、滑り台とかブランコとかあるんだけどさ、それを滑ってる時がね、一番楽しいかもしれないな。だってねえ、なんか、ここでブランコとか滑り台やっているとさ……。あ、バッタいた。フーン（笑い声）、私バッタ捕まえるの上手いんだよ？

魔界ノリりむ 配信タイトル及び「S.T.」より

『いつから朝でどこから友達なの？』

谷崎潤一郎 「饒舌録」（『谷崎潤一郎全集』第二十巻）

筋の面白さは、云ひ換へれば物の組み立て方、構造の面白さ、建築的の美しさである。此れに芸術的価値がないとは云へない。



羽田..お願いします。そうですね、これなんですけど小説とか歌詞じゃなくてまた別のところから持ってきてても面白いんじゃないのかなということをやってみたんですけどこれは配信ですね。YouTubeの。配信で会話の内容を切り取ってみました。

だからちよつとなんていうんですか、文章上おかしい部分も若干あるんですけど、そこも含めて読んでもらいたいなってやつです。最初の二つの文章なんですけど、最初のこの文章は普通にナンを作る配信なんです。配信中に。その時に出た会話です。てことで最初の二文だけ読んでもらってもいいですか？

佐藤&小島..読みました。

羽田..はい、ありがとうございます。それじゃあですね、この二つのポイントからちよつとみていきたいと思えます。さっきも言った通りナンを作った冬の冷たい空気の中で配信してて。配信やから無言じゃダメじゃないですか、その時に何も考えず無意思の状態で言葉を紡いでいるっていう感じなんです。で、この無意思ってのが重要だと思っていて他人の顔を伺って語られる雑駁な言葉ではないっていう...：わかりますか？

佐藤..はい。

羽田..無意思なんですってことなんですけど。

佐藤..はいはい。

羽田..言うたら自然に出てきた言葉、純粹な言葉、子供のような言葉っていう感じなんです。で、二つ目のポイントなんですけどこの無意思の状態が紡がれる言葉が日常の小さいところに幸せを感じられるっていうのが彼女の観点とか価値観を感じるものが出来て素晴らしいかなっていうことで挙げてみました。

羽田..で、まあここまでのやつなんですけど雑駁な文章とか言葉っていうのは美しくないのか？っていう疑問になってくるんですけど他人の顔を伺って語られる言葉、大衆を意識して語られる言葉っていうのは実際に心を經由して語られる言葉ではないですよ。

その他の人の顔を伺うっていうのは大衆を意識することなんです。そういうことよって変化してしまつた言葉っていうのは完全な自分の言葉とは言い難いですよね。だからといって美しくないとは断言することもできないかなっていうのが今のところの僕の考えです。

で、次の文章なんですけど、これはただボエムみたいなやつですね。読み上げるんですけど、

「いつから朝でどこから友達なの？」

っていうボエムです。はい、で、このポイントなんですけど、えっと、これは僕の批評じゃないんですけど前半で自然の情景を描き後半でその自然を比喩的に呼応する人間の感情の機微を謳うという古今東西を問わず詩の基本となつてきた構造がたつた十七文字に無駄なく述べられている点が美しいと指摘されている。

そうですね、じゃあ二つ目のポイント見て行きますね。これTwitterっていうかTwitterに投稿された文章で。っていうことは作爲的な文章なんです。大衆を意識して作られた文章なんです。でもそんな文章やけどふと考えさせられるような文章で短くて読みやすいっていう、これは構造的な美しさっていうか。さっきの雑駁やから美しくないっていうのは矛盾しますよね。雑駁やけどいい文章やんって取り上げてみました。ここまで大丈夫ですか？なんか自分でも....

佐藤&小島..はい。

羽田..大丈夫ですか、ありがとうございます。今取り上げた中やったら文章の美しさは純粋な心が表現されたなんていうんかな、根源的な美しさって言う言葉はちよつと自分でもどうかなって思いながら書いてみたんですけどその根源的な美しさとか人を感動させる技術は文章に組み込まれた構造的な美しさの二種類があると……

その構造的な美しさに近いことを谷崎潤一郎が研究してたんで、引用してみました。はい、言うたらあれですね、文章の構造がいろいろのはそれはなんているんですか、建築物が素晴らしい造形をしててそれに美しさを感じるものと同じものがあるっていうことを言うてはります。で、結論としてなんですけど構造的な美しさの文章の中には根源的な美しさを内包するものもあるけど、根源的な美しさの文章を書くとき、その中に構造的な美しさがあれば不純物として扱われる、てことで小説や脚本で根源的な美しさを表現するのはほぼ無理なんじゃないかなっていう結論に辿り着きました。

はい、で、一節から根源的な美しさみたいなやつを表現するのは無理やと思っただんですけど、小説全体からそれを感じさせることは可能だと思っっています。例として挙げると『蛇にピアス』をあげておくと、ピアスに対する好奇心とかだらしなない性欲などが幼い青年期の感情としてうまく表現されているんですね。芥川この純粋性を表現するにはこの一節の文章にこだわらなきゃなくて、キャラクターの細かい設定に準じた作者の心を経由して綴っていくことが答えになっていくんかな？

佐藤..えーっと、配信からとってくるっていうのはすごい面白いかなって思っただんですけど、なんだろう、配信中っていうのはイコール無意思になるのかって思ったのが一つ。

羽田..うん

佐藤..で、そのなんだろう、雑駁な言葉が美しい……なんだろうな、その美しいっていうのが二つあって、僕があげたのは構造的な美しさ、文章としての美しさとか単純に何かを見て自然描写を見て美しいな

って思うみたいな感じの美しさがあるっていうのは確かにそうだなって思いました。そうなるのもし何かを書くっていう場合には、作者の感覚とかそういうものをできるだけ表現できるっていう点では配信とかだと言葉の強弱とか、文章だったらそういう点では聞く人、リスナーになるんですかね、リスナーにとつてはわかりやすいのかなって思いました。小説だと文字の連なりじゃないですか、言葉の連なりだからこういった感情で書いたけどなあっていう感覚に相違があると思うんですよ。

羽田..あー。なるほど。

佐藤..読者と作者の間に。けど映画とか配信とかラジオとか言葉に音があるものだと言葉の強弱とか言葉の出し方によって、言葉が持っている意味合いっていうのを表現できるんで、そういう点では美しい文章っていうのは、美しい文章イコール作者の伝えたい文章だと仮定すると小説よりもそういう音がついたものの方がわかりやすいのかなって思いました。

羽田..たしかに。

小島..うん。

佐藤..っていうのになると、そういう点から持ってくるのもアリなのかなって思いました。

羽田..なるほど、ありがとうございます。

小島..じゃあ、佐藤くんが配信のそこを触れてたんで、次の

「いつから朝でどこから友達なの？」

つていうところなんです。Twitter から持ってきたんですよ、この文は。

羽田.. そうです。

小島.. そつから持ってくるのか、配信から持ってくるのは僕も予想してなかったんですけど、この一節だけやったら、僕が感じたように予想できなかった文章とつなぎ合わせるのが面白いっていうのもしかしたら繋がってくるのかなってちょっと共通点を見つけてましたね。で、根源的な美しさなんですけど、配信がもし誰かに向けてのものではないものだとしたら純粋な言葉というか独り言のようなものが美しいって言うてはったと思うんですけど。

羽田.. はいはい。

小島.. たしかにそれはそうなんじゃないかなってとも思います。小説でも誰かに向けて書いたものか、書いてないものかっていうのは紙の上なんだからないんですけど、それも確かに一緒のことが言えるんじゃないかなってふうに思いました。以上です。じゃあ三人の発表が終わったってことで。

佐藤.. 羽田さんのんですけど、配信から持ってくるのが面白い、さっき言ったんですけど音がつくのが結構ポイントかなって思いますね。

羽田.. うん、その音がつくって言う中でさっきドラマとかを挙げてましたけどもともとは脚本っていう文字に起されたものを読み上げるじゃないですか？

佐藤.. うん。

羽田.. でも、この配信系のとえばいま、こうやって話している中で小島くんにわかってもらおうっていう意思はあるけど、その程度の意識しかないっていう意味で純粋性がより……

佐藤.. 高い？

羽田.. そう、高い、強いのかなっていうふうに言っときたいですね。

小島.. でも全員美しいって感じてるのはこの三人の中やったら互いに違うものが多かったんじゃないですかね。

羽田.. そうです。

小島.. 佐藤くんやったら、感情の表現の仕方やテンポとか無数の情報の切り取り方とか視点がすごい美しいとか比較的長い文章をあげてはったとおもうんですけど、僕はけっこう短い、短的な文章とか小説全体を通しての意味合いとか。

佐藤.. うん。

小島.. 羽田くんは配信とかそういうところに純粋性を感じてるところなんですけど、全員ちゃうくて。

佐藤.. だから美しい文章っていうのをどう定義づけるかっていうのがけっこう大事かなって思いましたね。

羽田.. あー。

佐藤.. だからたとえばそれぞれの美しさってあるじゃないですか。それをなぜ美しいって言葉一つだけで表現できるのかっていうところ、そういう点では人それぞれあるけども、こう何か商業的なものになるときは美しいんだよって言われるじゃないですか。なにか見て美しいって思う、人それぞれ感覚は全然違うはずなのに声に出してもらったように感覚とか違うはずなのに、何かを表現するときに美しいって言う、何か価値のあるものになるっていうのがなんでだろうな？ って思いました。あまり関係ないかもしれないですけど。

美しいっていうものの定義づけは難しいなあと思いました。

羽田.. そうですね、こんなに色々美しい言葉がある中で一つに定義するのは難しいなあっていうのは僕も感じましたね。

小島..定義付けするのは無理なのかもしれませんね。

佐藤&羽田..うん...(納得)

小島..何かしらの共通点(美しいと感じる瞬間の)見たいなものはあるかもしれない  
ませんが、定義付けはやっぱり...

羽田..例えばですけど、共通性みたいなものはつきりさせることができれば  
定義付けに近いことができるかもしれませんね。

佐藤..ありますか？(美しいと感じる瞬間の共通性)  
羽田..うーん。考えてたんですけど、わからない。

佐藤..僕のは、割と「何かがあつてそれをどう表現するか」っていうところでは、  
なんだろう...:純粋性というものは皆無だと思ふんですよ。羽田さんの  
言葉を借りるなら、構造的(美しさ)の方。それでいうと、「いつからか  
朝で、どこからが友達なの？」というのも構造的美しさで似てるのかと  
思いました。それだと、小島くんが取り上げたのは文章中の意味合い  
ていうのが重要になってくるので配信の方に近いのかと思いました。

羽田..なるほどな。

佐藤..どうですか。僕はそう感じました。構造的美しさと純粋的美しさが存在  
するのであれば、僕のとボエムみたいなものが構造的美しさの方に分類  
されて、配信と小島くんがあげてくれたようなものは純粋的美しさ？  
とか意味合い的なものに分類できるのかなと思つています。

羽田..佐藤くん的には、小島くんの「死刑っていつ執行されるのか。教えてくれ  
るのかしら」(『全てがFになるより』)っていうのは純粋性の方に分類で  
きるかと考えていられるのですか。

佐藤..純粋性というよりは、意味合い的なもので僕は分類してます。純粋と  
いうのは感情的なものですよね？ これって価値観的なものじゃないで  
すか。僕なら「死ぬのは嫌だな」みたいなものが通説だと思ふんですけ  
ど、この人は死ぬこと||人間の感覚？ 覚醒が不快なら快楽をとるな

うもの、つまり寝るということ。っていうことは死というものは  
快楽を伴うものっていうことすよね？ これって。

小島..そうだと思います。

佐藤..そうなる感覚的な方？ うーん。なんだろうな。文章というよ  
りかは描き方？意味合い的なものを重要視した方がいいのかしれ  
ない。

羽田..僕もこの文章は構造的なものでも、純粋なものでもどちらにも  
分類できないと思つていて、なんか共感性を呼ぶ美しさみたいな  
ものだと思つて、この三つがあれば、全ての文章が分類できるの  
かなと感じました。

小島..なるほど。

佐藤..なんかこう、目新しいものを見て感じる美しさもあるのでそうい  
うものかなと、私は感じました。

羽田..なるほど。

佐藤..これはちょっと異質なのかもしれませんね。

佐藤..歌詞っていうのはどうですか。ボエム調ですよね。詩という意味  
では。そうなるかと、羽田さんが言つてたじゃないですか。詩も考  
えてみないといけないのかなって。

羽田..そうですね。

佐藤..長ければ、長いだけ雑駁になるものが必要になってくるつてあつ  
たじゃないですか。前のところで。詩というものはそういう雑駁  
なものをできるだけ排除して、まあ俳句なんです。そういうものの  
典型で十七字という縛りとかがあるから。十七字やったら無駄な  
ものを書けないって思ふんです。そうなるかと詩というのも純粋なも  
のの連続性に構造的な美しさを組み合わせることで美しいものに  
なつて行くのかもしれないですね。

羽田..その詩のなかにも俳句と川柳があつて…。ん？川柳が季語いるやつでし  
たっけ？

佐藤..いや、俳句が季語いるやつ

羽田..すいません。俳句が季語いるやつだったたら、季語を入れているという時  
点で、ルールに縛られて、なんていえないかな、大衆を意識しているという時  
部分があると思うんですよ。

佐藤..俳句は構造的な美しさというの重要なポイントだと思う。枕詞とかね  
意外性なものを描いたり、共感的なものを描いたり、いろんな価値観が  
存在するという点では小説に近いものだなと感じました。

羽田..んー。サラダ記念日って俳句ですか？

佐藤..川柳？詩？あれですよ。

羽田..

「この味がいいねと君が言ったから七月六日はサラダ記念日」

つてやつなんですけど。

佐藤..五・七・五・七・七？

小島..初めて聞きました。

佐藤..うそやん。

羽田..これは、大衆性を感じひんなど思っただんですよ。

佐藤..うん。

羽田..もう一回読んでいいですか。

一同..はい。

羽田..「この味がいいねと君が言ったから七月六日はサラダ記念日」つてやつ  
なんですけど。

佐藤..短歌ですね。

羽田..そうですね。

僕はこの詩から大衆を意識したものは感じなかったですね。  
佐藤..どうなんやろ。共感性という点では大衆を意識した感じがある  
と思う。

羽田..あー

佐藤..売れるっていうことはイコール共感されるか、なんだろうな…  
羽田..あれじゃないですか。純粹に綴ったけど、それがたまたま共感性  
を生んだだけ。みたいな。

佐藤..かもしれないですね。でもこの人ね、「寒いねと 話しかければ寒  
いねと答える人のいるあたたかさ」とか「ハンバーガーショッ  
プの席を立ち上がるように男を捨ててしまおう」とか「大きけ  
ればいよいよ豊かなる気分東急ハンズの買い物袋」とか、そうい  
うことから見れば雑駁なところじゃないですか。大衆性を意識し  
ているというよりもみんなが経験したようなことを持つてくるこ  
とで「あるよね？」みたいな「いいね」みたいな。

小島..共感性みたいな？

佐藤..そうそう。共感性をうまく短歌にのせてるんだと思う。

羽田..なるほど。今回まとめるのむずかしそうですね。

小島..美しさの中に構造的な美しさとか意外性、共感性の美しさとかは  
全然あつてもいいんじゃないかなと思いました。

羽田..なるほど。

小島..定義付けるわけじゃないけど、こういう美しさが多いよつていう  
意味で、まとめていくのがいいと思う。

一同..いいね。

羽田..ここで教授の意見を聞いてみたいんです。  
桑原先生(以下桑原)..そうですね。結構面白い話が出てきたって感じだね。  
面白いけど、だんだん美しいのかどうかっていうのが難しくなっ  
てきた感じはするよね。美しいというよりは良い文章といえれば、

良いのかな。みんなまあそれぞれが美しい文章を持ってきたわけだけだね。そこはまあ結論は出なくてもいいというか、いろんな考え方が可能だっという話にオチでも良いと思う。

一同.. そうですね。

桑原.. だからいま、それぞれ喋ってくれていたことでまあまあ良いと思うよ。

美しい文章っていうお題でこれだけ色んな文章が出てきたということ自体が面白いので、その面白さは活かした方がいい。

小島.. まあ、とりあえず来週、古川さんのものも聞いてみたいっていうのもありますね。

佐藤.. 今の所、共感性と意外性と純粋性やっけ？ あと構造？ ...: 雑駁なものにも美しさというの存在すると僕は思うんですけどね。例えば共感性に含まれるとかね。サラダ記念日は共感性だと思ってる。羽田さん的にはどう考えてるの？

羽田.. さっきの俄万智の他の詩をきいてみたら、大衆性を意識した雑駁なものだとも思ったんですけど、『サラダ記念日』は共感する部分ってあるかな？

佐藤.. これはサラダじゃなくてもいいんですよ。今日何かあったなみたいな、今日のご飯やったら何かがおいしかったなとか、今日は街中でこけたなとか。そういう人それぞれが持つて今日ってこういう日だったなみたいな日記をうまく五・七・五・七・七に落とし込んだことがうまいのかなと思う。一人一人？これやったら君っていう言葉が出てくるけど、君っていう言葉がないので、一人の目線からの今日のこういう出来事っていうのを日記に書くのではなくて、短歌として表すことが、なんだろうな。サラダというものでは共感？共感という言葉はよくないと思うけど、割とこうみんなにある「ただの日」にしかないけれど、こうして短歌として表現することで七月六日に意味合いを持たせているのがうまい。

小島.. サラダじゃなくてもいいけど、例えばステーキとか。そういう日もあるよねっていう感じの共感だと思いました。

佐藤.. そうそう。だから共感っていうか。みんな経験したことあるようなただの一日のある状況だけど、それを言語化する。いらぬものを取り外して。だから、この前後に何があったかわからんけど、この味がいいねって、あるよねって、みんな経験するよねってみたいなものなんですかね。

一同.. (笑)

羽田.. なるほど。

佐藤.. でも、これが売れたのが一九八七年なので、割と現代の作品なので、別にサラダが特別な意味合いを持つてたとか、七月六日がなんかの日っていうのがなんかの日みたいなものではないと思うの。なんかこう、昔の短歌とかからはきっちり美しさを表現するものからは脱却しているのではないかと思う。

小島.. 個人的な意見なんですけど、サラダ記念日を読んだときに上手いなとは思ったけど、美しいなとは思わなかったかな。

一同.. (笑)

小島.. だから、やっぱり美しさっていうのは人それぞれっていうのは大前提としてあった方がいいと思う。その中でも構造的なやつとか、分類したやつがたくさん出て来たほうが面白いと思います。

佐藤.. 羽田くん的にはどんな感じ？

羽田.. 佐藤くん達の意見を聞くまでは、サラダを食わせて、喜んでいる姿を純粋に描いているのかなと思うんですけど、まあ、それも一つの解釈として正しいのかと思うんですけど、佐藤くん達が言いはったように、サラダという日常のキーワードをサラダというもので置き換えていて、そこらうまさを感じさせる美しさがある

というのも理解できた。むしろ、そっちの方が短歌として正解の解釈だ  
と思いました。

佐藤..なるほど。

## 大学生四人が話してみた

【後編】拡大する文章 増幅する美しさ

千差万別の「美しい文章」を語り合い混乱する私たち。  
古川が参加し、議論はさらに加速していきます。



木内昇『櫛引道守』

歩を進めると、思下の雪が鳴いた。登瀬は、音に耳を添わせて数を唱えはじめる。

——ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう。

つぶやく声が、等しい間合いをとって足音に重なっていく。右手に手桶を抱え、前のめりに進むうち、山際から朝日が顔を出した。白一色に塗り込められた村の景色が、途端に息づいていく。

雪を踏む音は蛙の鳴き声に似ると、と歩きながらも登瀬はちらちらと思うのだけれど、考えが膨らみそうになるのをひとつ深呼吸して追い払い、頭の中を真っ白にする。そうしてただ、身体で拍子を刻むことだけに心を傾ける。

——十二、十三、十四。

瞬きをするたび、睫毛に降りた霜が飛んで、目の前を光の粒が駆け回った。息をすれば鼻の奥がツンと凍みる。立春を過ぎてても木曾路には冬しか見当たらず、村を埋め尽くす雪は未だ夜ごとに背丈を伸ばしているのだ。

伸び上がって暗い井戸の中を覗き込み、「あー」と叫んで跳ね返ってくる音に耳を澄ます。と、すぐ後ろで「なにしとるだが」と声がして、登瀬は飛び上がって身を起こした。

谷崎潤一郎『美食倶楽部』

口腔全体へ瀾漫した葡萄酒に似た甘い味が、だんだんに稀薄になりながらも未だ舌の根に纏わって居る時、先に嘔み込まれた汁は更に噎になつて口腔へ戻つて来る。

どんな僅かな隙間からでも一点の明かりさえ洩れて来ないように、窓や入口の扉は嚴重に注意深く密閉される。部屋の中は一寸先も見えないほどの濃厚な闇にさせられる。その、カタリとも音のしない、死んだように静かな暗黒裡に、会員は黙々として三十分ばかり立たせられるのである。

島崎藤村「初恋」

まだあげ初めし前髪の  
林檎のもとに見えしとき  
前にさしたる花櫛の  
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて  
林檎をわれにあたへしは  
薄紅の秋の実に  
人こひ初めしはじめなり

わがこころなきためいきの  
その髪の毛にかゝるとき  
たのしき恋の盃を  
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に  
おのづからなる細道は  
誰が踏みそめしかたみぞと  
問ひたまふこそこひしけれ

高村光太郎「レモン哀歌」

そんなにもあなたはレモンを待つてゐた  
かなしく白くあかるい死の床で  
わたしの手からとつた一つのレモンを  
あなたのきれいな歯ががりりと噛んだ  
トピアズいろの香気が立つ

その数滴の天のものなるレモンの汁は  
ばつとあなたの意識を正常にした  
あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑ふ  
わたしの手を握るあなたの力の健康さよ  
あなたの咽喉に風はあるが  
かういふ命の瀬戸ぎはに  
智恵子はもとの智恵子となり  
生涯の愛を一瞬にかたむけた  
それからひと時  
昔山嶺でしたやうな深呼吸を一つして  
あなたの機関はそれなり止まつた  
写真の前に挿した桜の花かげに  
すずしく光るレモンを今日も置かう

石川啄木『一握の砂』

東海の小島の磯の白砂に  
われ泣きぬれて  
蟹かにとたはむる

頬につたふ

なみだのごはず

一握の砂を示しし人を忘れず

大海にむかひて一人

七八日

泣きなむとすと家を出でに

『哀しき玩具』

呼吸すれば、

胸の中うちにて鳴る音あり。

風よりもさびしきその音！

眼閉づれど、

心にうかぶ何もなし。

古川…ちよつと長いんですけど、冒頭部分とかだけでも大丈夫なんで、目を通  
していただけたら、教えてください。

佐藤&小島&羽田…読めました。

古川…はい、ありがとうございます。いくつか挙げたんですけど、『櫛引道守』  
や『一握の砂』『悲しき玩具』などは空気感や設定、舞台にあった表現が  
なされているということでも美しいと感じているのかなと思いました。

『美食倶楽部』の熟語が好き、派手な文章が綺麗と感じる感覚は、作品  
の空気にあっているものとは少し違うのかなという考えで、視覚的に、  
字の上に目を滑らせる時の美しさや、頭の中で音として再生されるとき  
のリズミ的な要素だと思います。島崎、高村、石川の作品に感じている  
和歌のリズムの名残を美しいと感じていることと、同じ種類の感情だと  
考えました。

『一握の砂』とかあげたんですけど、これももし、現代仮名遣いで書か  
れていたら、(美しいと感じないと。それは印刷されていることが前提  
で、紙の上に書かれた字を読むことが前提となっているんですよ。羽田  
くんの持ってきてくれた例だと、配信の中で話した言葉だけど、そんな  
風に音声やったら美しいと感じないかなと思いました。私は印刷物とし  
て手元に来たときに、その言葉の塊を、視覚的に、または脳内のイメー  
ジでの音の響きというところ美しさを見出していると考えました。  
そこから、美しさの中には内容とリンクしてその世界観を守っているも  
の(内容的なもの(美しさ)と、リズムや表記といった機能的な部分の二  
種類の美しさを作品の中に見出していると、私の個人的な美しさの意見  
です。

先週の動画(前編)を見た時に、映画とか歌とか音の方が強弱などを表せ  
るから、より心的なものが伝わるんじゃないかとおっしゃってたんです  
けど。私は逆に音がつくと伝わりやすいと思うのは、文字の連なりに焦  
点を当てたときには確かに強弱やアクセントの問題で伝わったりするの

かなと思います。でも、物語の中の流れの中での意味や、意外性  
を突くのだと、印刷された文字の方が優位なのではないかと思  
いました。

羽田…そうですね、親和性による美しさと表記とか、機能的な美しさっ  
ていう二種類の分け方はいいなって思いました。

小島…先週配信とか、僕は歌詞とかから美しい文章を取ってきたんです  
けど、配信とか歌詞って元々歌い手とか、読み手によってリズム  
が決められてるのであって、音として取るなら、ある種一通りの  
受け取り方しかできないけど、詩とか短歌とかだったら、リズム  
とかも自分なりに感じる事ができるので、そういう意味では印  
刷物の方が幅が広く受け取れるっていうのは共感しました。

あと仮名遣いですね『レモン哀歌』の「待つてゐた」とか昔の表記  
だと思んですけど、そこに美しさを感じるのは気づかなかった  
です。確かに時代性は感じつつも、それも美しいなと僕は感じま  
した。

佐藤…先週の話やと、美しさっていう漠然としたものを、それぞれ美し  
さっていうのもいろいろありますよねって話をして、いろいろ出  
た中で、古川さんが挙げられてる、内容との親和性であったり  
か、表記的な美しさという新たな種類があるのかなと感じました。  
また、その美しさの種類に合った表現方法というのがあると思っ  
て、機能とか表記的な美しさを感じるのには、やっぱり印刷物と  
いうのは強いかなって思いました。それが音になると、漢字を使  
っているのかわからない。調べれば分かるけど、一通り聞くだけじ  
ゃ分からないという点では、しつかり文字となってるものじゃ  
ないと感じ取れないものかなって思います。

先週あげた…羽田さんがあげたあれなんですって。共感性？  
純粋なものだと、音の方がイントネーションであるとか、語尾の

強さとか、直接言葉に乗るので、語り手、作品なら作者の、書き手とか語り手の気持ちがいりリアルに伝わるのは音が入った方がいいのかなって思いました。

表記的な美しさだと、歌詞だと、例えばあんまり音楽詳しくないんですけど、「地球」って書いて「ほし」と読むとか。そういうのって表記的には「地球」だけと「ほし」と読ませるので、表記的な美しさと、音的な美しさの差みたいなものを味わえるのかなって思いました。

古川..なるほど。

佐藤..何か、三人の意見とか感想を受けてありますか

古川..うーんと、そうですね。先週、純粹なものは美しさの一つの種類とあげてらっしゃったと思うんですけど、私のあげた表記的なものとかってものすごく雑駁、印刷したときのイメージとかによつてものだと思っんですよ。商業的な、商品になった時の見た目を考えるものだから。ものすごく対極にあるものかなあって思ったりして、そういうのを考えたときに歌詞カードって、意識して作詞、「ほし」って平仮名で書けばいいところをわざわざ「地球」って書いて「ほし」と読ませるみたいな意図的なものに、美しさを感じるというのは難しいなと感じました。なぜそれが共存というか、別の観点だけど、同じ美しいものというくくりの中に存在できるのかなって。

佐藤..美しいって人それぞれあるじゃないですか。というのを考える時に、人それぞれなんで、究極を言えば人それぞれなので、いうてもしょうがないよねって話になると思うんですけど(笑)

古川..はい、そうですね。

佐藤..その場合に、できるだけ多くを挙げていくなかで、美しいという言葉が広すぎてわからない。広すぎる分共存しているというか、「○○な美しさ」をつけないと、不可能なのかなって思っつて。小説に限らず、絵でも、音楽でも。めちゃくちゃ綺麗な絵も美しいと思うし、これにはこう

いう意味があるんだというのを知った上でのそれいいねという、いろんな観点の美しさがあるっていうのが大前提になる。無限にあるなかで、どこで落とし所を見つけていくのかっていうのが結構大切かなって思っつて。

古川..さんが挙げられたやつって、僕が挙げた、文字の連なりとしての美しさとか、機能的な美しさって方と同じように考えていいんですかね？

古川..動画観た感じでいくところいうこと仰つてるのかなあと思つたんですけど、私の挙げるやつは、その、佐藤さんの機能的なところに近いのかなって。

佐藤..僕も最初そうだったんですけど。美しいと言えばこういうのだよなっつて思っつた。先週、話をして羽田くんとか小島くんの話を聞いてそういう観点があるんやなっつてなっつて。

羽田..この話し合いをして、自分にプラスになったのは、美しいものっていうものをだんだん整理できてきたなっつてプラスに感じている部分です。

佐藤..確かにそれはあるかもしれませんがね

羽田..じゃあそろそろ桑原先生に.....

佐藤..えらい早いな(笑)

桑原..まず話の流れとしては、美しい文章って言った時に、現代においては多様なものが文章として考えられているということが考えられるので。例えば動画配信なんかでも、動画配信って一種インターネットを使った録音されたラジオみたいなのところがあっつて。村上春樹の『風の歌を聴け』なんかラジオ番組の言葉がそのまま使われて、まあ、あの場合にはマイクをオフにした時の言葉なんかも混ざつたりするんだけど。でもかつてはラジオで語られた言葉っていうのは、注目はされたけどその場で流れ去っていくもの

というか記録されないものとして聞き流されてきたもので。今ではラジオ番組なんかも配信になって繰り返し聞いたりするし、YouTubeの動画配信何度も当然繰り返し何度も聞けるわけで。その点でこの配信なんかも文章として行き来されやすくなっているところがあると思うんですよ。文章っていうものの範囲が広がったということがここに現れていると思うし。だからまず、「文章」っていった時に、そこはものすごく広い世界なんだというところから初めて、当然その広い文章の世界には様々な美しさがあり得ると。これまでも谷崎潤一郎も含めて『文章読本』という本がこれまでいろんな作家たちによって出版されて、そこで美しい文章とはどんなものかということのプロの作家が語りたりしているんですけど、そこで挙げられているのは小説、せいぜい随筆くらいなもので。語られた音声としての言葉とか、歌の歌詞なんというのは取り上げられることはなかったんで、そこはもう現代における文章とは違うのであるというところから初めて、繰り返しになるけれども、そこで表現されている美しさというものも違っているという風に進めていくと話としては進めやすいし広げて行きやすいと思いますけどね。

桑原.. 後まあ、言葉には文字としての側面と、音声としての側面があるっていうのは確かかなところだし、実際動画配信とか歌詞なんかは、文字起こしされたり、CDに歌詞カードがついていたり、ネットで歌詞が公開されていたりするんだけど、やっぱり音である、音声性っていうのは取り落とせないところだと思えますけどね。この辺りはかつては、詩にしても小説にしても音読されていたと。子供向けに読み聞かせとかだけじゃなくて、大人が音読していたことがあから、音と文字表記っていうのは重要なところで。旧仮名遣いだと言声としては我々が読んでいるものと一緒なんだけれども、しかし表記として見た目が異なっているイメージの問題ですね。特に「あいうえお」が「はひふへほ」になるわけ

で、それぞれの文字が与える印象っていうのは違ってくるから、文字の問題と音の問題。

あとは歌詞と、実際に歌われる歌ってちょっと違いますよね。カラオケとかで流れる歌詞は歌そのままだけど、〇〇とか本当かに歌詞が載せられる時って結構リフレインが省略されたりするじゃないですか。何度も繰り返ししているのに、詩としては一回しか出てこない。ところが実際聞いてみると繰り返し繰り返し同じ歌詞が続くことで印象が強くとえられるというところもあるんで。詩として読めばね、同じ言葉を繰り返し繰り返し読んでいるのは無駄って思うけれども、声の力、音の力ってことで言えばその繰り返ししが、強い印象を与えることもあるから。歌詞にしてみても実際に歌われる歌と、流通している歌詞であるものとはまた違うと思うので、いろいろ違うと思うんですけどね。

小島.. 歌詞とか小説とかにおいては、とか、リズムとか、人によって違うんですけど、テンポ感とか大事なんじゃないかっていうのはみんな共通しているのかなって思います。

羽田.. 話はちょっとだけ変わるんですけど、先ほど桑原先生のお話にあった、ラジオとかYouTubeとかの動画が繰り返し聞けるようになっていないですか。いつでも文字起こしできるような媒体だから、それも文章としてまともな面白いんじゃないかってことですよ。

桑原.. それが当たり前の時代になっている。昔は音声っていうのは特別に録音されない限りは、その場で消えていくものだったけど、今はYouTubeじゃなくても、動画が簡単に撮れるから、話し言葉に対する認識も変わってきてるんじゃないの。

佐藤.. だからより作られたものが多くなる感じっていくということかなあ..... 書き言葉への接近という感覚にあるのかなと思いますね。

佐藤…前羽田くんが言ってくれた寒い中独り言で喋ったみたいな言葉も、文字

起こされるってことは、あの方が純粹な、心をそのまま言ったというのが、文字としてあげられるのであれば、これからは、より作られたもの

のにしようかなあという感覚が出てきてもおかしくないと思うんです。より、接近していく、作られたものになっていく。いろんなものが。その、繰り返し聞かれるがために、というのはあると思いますね。

羽田…文章の定義が変わって来ているということですか。

佐藤…定義というか、音っていう一過性のものが半永久的に残っていつでも聞けるという状況になると、言葉の重みというものが変わってくるのかなと。

小島…Pianoとか当たり前に持っている時代になって、音声とか、言語化された

ものをまた文章としてみた時にも、その美しさが生まれるという感じでもないかなって思いました。美しさの種類が一個増えたじゃないけど、時代とともに、そういう表現の美しさも加わってくるんですね。

———このように座談会は終わりを迎えた。  
各々は何を思い、何を得たのだろうか？

## 座談会を終えて

小島諒太

美しいと思う文章を互いに発表し合い、やはり気づいたことは文学という定義が曖昧なように美しい文字表現という定義も曖昧だということだ。原点に戻った気はするが、四人が持ち寄っただけでもかなり多い数の美しい文章を発見することが出来た。特に話し合いの中で面白かったのが配信だ。配信で話されたことを文字起こすとそこに美しさを見つけることが出来た。音に乗った言葉を文字起こした時、「え、え、え」やブログで発信される言葉やコメント欄など個人で文章を発していくことがスマートフォンが普及してからより簡単になった。小説や詩だけでなく、誰かが不意に発信した言葉や文章の中には美しさが潜んでおり、時代が進むと共に美しい文字表現も増えていくのではないだろうか。

羽田敬史

「美しい文章」を追求した結果、得られたものは「美しい文章の定義付けの困難さ」だけだった。創作に活かそうにも定義がはっきりしていないため、活かすことができない。だが、このように過去の文壇から現在の文壇までずっと議論を交わした結果、「美しい文章」という権威がより強固なものになったのだろう。仮に、「美しい文章」というものの定義がはっきりしてしまったり、小説や舞台、映画それぞれが同じようなものになってしまったり、つまらない世界になってしまうと思う。あえてオチをつけるなら、人の好みは千差万別ということではないだろうか。



古川美優歩

文章と言われると、私は印刷された文字を想起してしまいます。そして、技法や機能的に巧みであるものを美しいと思いつきました。けれど他の方は、歌詞や動画、人の口からこぼれ出るものを文章とし、美しいと感じる。私にはなかった感覚で、とても新鮮でした。私たちが作ったこの本は、私たちの座談会を元にして作られています。つまり書き起こす時に、何回も見直した動画はもはや文章なのだ。何か文章表現がしたい時に、動画やラジオが選択される、そんな時代に創作をしているのかと、何やら不思議な気持ちになりました。ですが嫌悪感はなく、これを受け入れることが、私の美しいという価値観を広げてくれると感じました。何より、自分とは違う他者の美しいものに触れることができましたのは、純粋に楽しかったです。この人たちに美しいと思われるような文章を、書いてみたいという気持ちになりましたね。

佐藤也於

美しい文章とは何かという疑問から始まった議論は、紙に書かれた文章だけではなく、歌やドラマ、映画など映像作品へ派生し、YouTubeで行われる配信にまで議論が交わされた。その中でやはり最も重要なことは「美しい」の持つ多様性である。この世界に存在するもの全てがある人物にとつては美しいなのかもしれない。それを他人がどうこう意見することは無粋であるし、意味のないことである。それぞれの持つ「美しい」こそが重要なだろう。またこれまで一過性であった音が文字化され半永久的に残されていく宿命にあるこれからの世界では言葉そのものが持つ重みや価値が変化し、新たな価値基準が形成されていくことが考えられ、その変化こそが新たな文化を形成する重要な鍵となるのではないだろうか。これから先、限りなく増えていく「美しい」を期待している。

## 創作

「美しい文章」について考えてきた我々が考えた「美しい文章」を創作作品として掲載することでこの書を終える。

羽田 敬史

「冬の日」

息を切らしながら辿り着いたのは、屋外スケート場を見下ろせる大きな階段でした。この階段は駅に直接繋がっていて、一段一段がとも綺麗にライトアップされています。まわりをみると、カップルが間隔を空けて階段に座っていて、とても幸せそうな表情を浮かべています。悲しそうな表情をしている人なんて誰もいません。まるで梅田の街にあるデイズニールランドのような世界でした。

「到着！さあ！はやくケーキたべよ！」

友梨さんがコンビニの袋を床に敷いて、その上でパウムクーヘンを開封します。そうして、僕たちに先ほどコンビニで購入したばかりのお酒をわたしました。息が上がっていて、汗でお化粧が落ちた先輩をつい見つめてしまいます。本当に綺麗です。え、最高すぎませんか？というモナちゃんの言葉を聞きながら僕はハイボールの缶を開けました。終電、まだ間に合いそう？友梨さんがそう聞いてきたので、あと

二十分ですと返答します。走って良かったです！早く乾杯しましょ！モナちゃんと言いました。

「じゃあ。二人とも、クリスマスマスのに勤務お疲れ様でした！乾杯！」

「乾杯！」

「おつかれさまです」

僕たちはすき通った夜の冬空の下で乾杯をしました。ライトアップされた青白い光が僕たちを照らします。階段から見下ろすと、カップルや、親子連れが屋外スケート場で遊んでいるのが見えました。スケート場の端っこでは女子大生らしき人たちが、スケート場を開放している企業のマスコットキャラの着ぐるみと写真を撮っています。階段には四組ほどのカップルたちがクリスマスという魔法にかけられお互いをつつくりあっています。どこを見ても幸せそうな光景。普段は内向的で大人しい僕の心もいつの間にかはずんでいました。こんな非常を感じたはいつぶりでしょう。

「じゃーんっ！これ見てください！」モナちゃんは銀色の小さな容器をリュックから取り出した容器を誇らしげに見せてきます。

「あ、モナちゃん、それどうしたんよ？」

「もしかして、クリスマスイベントで使ってたアイスのチョコスプレーじゃないですか？」

「さっすが、涼くん！わかってるう」

「さっきまで、散々つくってましたからね。わかりますよ。」

「そんなん持ってきて良かったん？」

「なんか、賞味期限が今日までだったから太田さんに貰ってもいいか聞いたらくれたんですよ」

「お！ないす！」

「これかけて食べたら絶対美味しいです」

よ」  
そういつて、モナちゃんはチョコスプレーをパウムクーヘンにかけました。バラバラとカラフルなチョコがパウムクーヘンに塗られています。  
「綺麗！」

本当にそう思いました。カラフルな粒状のチョコが階段の光でライトアップされ、キラキラと輝いています。これがコンビニで買ったパウムクーヘンとはとても思えません。

「じゃあ、たべよっか！」

「あ、待って！写真撮りたいです！」

モナちゃんは、ポケットからスマホを取りだし、被写体のパウムクーヘンを撮ります。

「じゃ、二人も撮るよ！」

スマホをこちらに向けてきました。

「わわわ！」

写真に慣れていない僕は同様し、急いで前髪をなおします。友梨さんは臆することなく、手に持ったお酒を持って素敵な笑顔を浮かべていました。

「はい、チーズ！」

僕はどんな表情をしていたのでしょうか。ちゃんと笑顔を作れていましたかね。

「涼くん、私も撮ってもらっていい？」

モナちゃんからスマホを渡されました。二人は早くも謎のポーズをとっています。僕は彼女たちがうまくフレームにはいるように階段を少し降りました。

「では、いきますよ！はい、チーズ！」写真撮るのも、撮られるのも慣れていない僕は普段よりも高い声でさういいました。

「なにこれ！」

僕が撮った写真を二人が確認しています。そうですか、そんなりうまく撮れましたか。なんて思っていると、涼くん、写真撮るの上手くないでしょ？と友梨さんに聞かれました。続けざまに、涼くん、めっちゃブレてるよ；とモナちゃんと言います。え

？ほんとですか！なんて言いながら撮った写真を見せてもらおうと、あらら、本当にブレてしまっています。これじゃ、なにがなんだかわかりません。

「よし！じゃあ、写真も撮り終わりまし

たし、食べますか！」

「よっしやあ、じゃあ乾杯！」

「いや、さっきしましたよ！」

二人の明るい会話に僕は思わず笑みをこぼします。

「あれ？そうやっけ？まあいいじゃん！乾杯

！」

「乾杯っす！」

「お疲れ様です！」

他のどのカップルよりも騒いでいます。まあ、距離もそこそ離れていきますし、彼らに迷惑はかかっていないでしょう。それよりもさつきから自然と笑みが溢れます。なぜ笑みを浮かべているのか分かります。楽しいからです。心と表情がちゃんとリンクしています。他人の前でこんな自然体になれたのはいつぶりでしょう。

「ぶはあ；、美味しい！」

友梨さんがレモンサワーをごくごく飲んでます。良い飲みっぷりです。先程まで全力疾走して、たくさん写真を撮りながらはしゃいでいましたからね。そのせいか、友梨さんがレモンサワーを飲

み干している姿はいつものさわやかな表情とは少し違って、職人のような表情をしていました。この表情の友梨さんも素敵です。

「あれ？友梨さんってそんなに逞しい人でしたっけ？」

思わず、僕がそう聞くと、友梨さんは大きな声で笑いました。自分でも普段とのギャップに笑ってしまったのでしよう。

「わ！いつのまにか時間やばいっすよ！」

モナちゃんが騒ぎ始めたので、時間を確認してみるとなんと終電まで残り三分に迫っていました。あ、先程から言ってる終電とは友梨さんのものです。この三人の中で友梨さんの路線が一番はやく終電をむかえてしまうのです。

「げ、まじか！おわろ！はよ、バウムクーヘン食べ切って！」

僕たちは三頭分したバウムクーヘンを一気に口のなかへ放り込みました。

「やばい。やばい。ほんまに間に合うかな……」

刻一刻と迫る終電の瞬間に友梨さんは焦っていました。クリスマスの夜に終電を逃して梅田で過ごすなんて、きつと娘を持つ親御さんなら間違いないでしよう。

「ごめん！走るわ！きょうは二人ともありがとうね！楽しかった！」

友梨さんが荷物をまとめて言いました。

「いえいえ、こちらこそ楽しかったです。誘ってくれてありがとうございます。ありがとうございました。」

僕はそう返しました。続けて出てきそうな、本当に嬉しかったです。人生で一番楽しかったクリスマスでした。という言葉を押さえ込みます。また、みんなで遊びましょ！というモナちゃん言葉

で助けられました。

「じゃあ！」

友梨さんは全力疾走で駅へと走って行きました。すごいスピードです。小さくなっていく先輩の姿を見ると、とても切ない気持ちになりました。ここから改札まで歩いても一分もかかりません。

きつと間に合うでしょう。嫌だな。間に合わなければいいのに。なんていう悪い気持ちも湧いてきます。終電を逃して朝まで一緒にいられたら、僕の気持ちをちゃんと伝えることができるのでしようか。

佐藤 也於

「雨」

まだ雨が降っていた。昨日から降り続ける雨はまだ止みそうにない。朝のニュースはこの豪雨のことばかり何度も何度もだらだらと流していた。その日はちょうど一か月前から高校時代のあいつと約束していた飲みの日だったが、流石に中止ということになった。朝、その相談をしようと連絡をすると彼は「雨で中止って速足かよ」と冗談っぽく言っていた。久しぶりの連絡なのに全く変わっていない声と話の内容を聞く心安した。昔からこいつはこういう人間で常にあつからかんとしている、いやただの馬鹿だ。高校2年の夏休み、僕のじいちゃんが死んで落ち込んでいた時も、僕の手を引っ張って町の外れにある丘に連れていき、馬鹿みたいな笑顔で「ここからの景色を見せたくてさ」と柄にもなくカッコつけて言っていた。でもここからがいつの面白い所でその日は朝から曇りっぱなしで全く景色は見えないし、帰り際には雨が降ってきて、家に着く頃には家の前にある川が氾濫しかけていたほどであった。それでも彼は「これも一つの思い出だな」と言い、笑顔を向けるのである。その時はいつもぶつきたらばうな僕も馬鹿みたいに笑って、二人して大雨の中、笑い合った。帰宅後はびしょ濡れの制服を母に見つかり、馬鹿みたいに怒られたが、雨の日は憂鬱な日と決めつけることのおろかさや馬鹿な男に気づかされたような気がした。それから十年が経ち、社会では大人と言われる年になった。身の回

りの多くのことが変わっていき、自分も多くの変化をして来たのかもしれない。もう十年前のあの日みたいにびしょ濡れになって笑い合うことはもうできないのかもしれない。それでもあいつと会ってまた馬鹿みたいに笑い合いたい、そう思った。こんな雨の日だからこそできることを探して二人でどこかに行きたい。僕はそこに掛けてあったジャケットを羽織って、雨の街に駆け出した。

「おもい」

君にこうして電話をするのももう何回目かな。でももう今回でやめにするよ。君のことがどうでも良くなったとかではないんだ。でももう離れて数年が経って、僕は一人で生きていくことに慣れないと思ってる。君ならそんなことでもないよ、二人で一緒に頑張っていこうよと言ってくれるだろう。でも君に電話をすることは君と共に生きていくということではないと気づいたんだ。僕がやっていたのはただ君に甘えているだけだったんだよ。もちろんわかっているよ。僕は一人で生きていくことなんて出来ないというところから。でも君に依存して、弱々しく生きていくことはもうやめにするよ。こんな姿を君に見せることは出来ないと思うからね。だから今回で最後にする。でもね、これだけはこの機会に君に伝えたいんだ。もう会うことも触れることも話すことも出来ない君のことを感じられるのが、数少ない写真と留守番電話の声だけだった。この二つだけに僕はこの数年支えられてき

たんだ。どんな時も支えられてきた。ありがとう。感謝している。これから先は君にただ支えられるだけじゃなくていつか会うことができた時に君を支えられるような人になるから。そのために頑張って生きていくからさ。だからほんとに、ほんとに僕がもうだめになったときにはそのときにはどこかで頑張らなくて祈っていてほしいな。その祈りがあれば僕はどんなことだってできる気がするから。もうこれぐらいにするよ。もちろん君に伝えたいことなんて山ほどあるけど。もう切るね。最後に。ありがとう。またどこかで。

「いきる」

カーテンの隙間から注ぐ太陽の光でその男は起きた。その光はベッドの傍の机においてあったコップの水に反射し、輝いている。男は輝きを放つその水を飲み干す。気温はこの季節にしては低く、部屋は冷え切っていた。昨晚の頭痛は未だ続いているようで、部屋の明るさとは対照的に男の顔は暗い。

それでも男は体を起こし、支度を始める。まずカーテンを開けた。先ほどまでカーテンの隙間からしか入ってこなかった光が今度は窓全体から部屋の中を照らす。ややまぶしそうで外を眺め、男は少し伸びをした。

空は海が上空に上がったのではないかといいほど美しい水色をしており、雲は一つもない。その空の中を一羽の鳩が大海原に取り残された一隻の船のように飛んでいた。男はその鳩を見つめ、悲しく微笑んだ。鳩が飛び去ると、その空に邪魔

が入ることはなかった。

男は着替えを済ませ、朝飲み干したコップで水を一杯飲み、かれこれ十年は履き続けている薄汚れた黒の革靴を履いて外に出た。外は部屋とは比較にならないほどに寒く、風が顔を刺すように吹く。家の前の道には昨日降った雨で出来た水たまりが夜中に凍り、それが太陽の熱によって少し溶けていた。その水は何人もが踏んできた道の汚れによって茶色くくすんだ色となっていた。しかしその水にさえ、太陽の光は刺さり、風が吹くごとにその表情を変えた。

男が毎日通るその道は人通りが少ない。その閑散とした道は、冬の寒さを一層、男に与えた。道の隣には川が流れており、水の流れる音はコンクリートジャングルとなったこの土地に微かな自然を感じさせる唯一の場所となっている。その川に棲む生物は人間が作り出した得体の知れないものたちに囲まれた生活を望んで生まれてきたのだろうか。それでもなおそこに住む生物は懸命に生き続け、彼らの使命を果たそうとしている。そんな存在が傍に生きていることを知らずに男はその道を通り過ぎた。

男は日がどうの昔に傾き、三日月が輝きを放つ中、またその道を通った。その表情は朝と同じく暗く、朝よりもその影を深めたようである。一度も上を見ることがなく、黒く舗装された道をただ一点見つめながら歩く。今朝から続く風は男の髪を逆立てるように吹き続け、街路樹の葉が出す音が男の叫びのように閑散とした道に冷たく響いた。その叫びはだれの耳にも届かず、常に響き続ける。

男はその道を進み、家に着く。朝にあった水たまりはきれ

いさつぱりなくなり、その数センチ右に小さな虫が一匹いた。男はその虫に気付くことなく、その上を通り家に入った。部屋は外気に比べると暖かさがあつたが、そこに存在する闇によつてその寒さを際立たせた。男はコートをその場で、脱ぎ去るとその足で、今朝脱いだままにしてあつた服に着替える。とそのままベットの中に入った、またすぐ来る朝に怯えるかのように。

外はまだ風が吹き、木々たちが揺れている。先ほどまで叫び声のように響いたその音たちは今度は自然を感じさせる音となった。そこには月の光が降り注ぎ、彼らの夜を彩る。男が一人眠るすぐ横で。

小島諒太

「思い出」

あの人の名前を思い出せない。  
嫌味や不平不満、愚痴ばかりを漏らしながら人を傷つけて生きていたつまらないだれかを。

あの時のことを思い出せない。  
海で溺れ呼吸ができなくなって死にかけたこと。どうやって助けてもらったんだろう。いつのことだっただろう。

あの場所を思い出せない。  
廃墟のような場所だったはず。床には大量の精神安定剤と割れたガラスが散らばっていた。湿気と埃が充滿し、ひどく廃れていた。あれはどこで見つけた場所だった。

あの人の名前なら思い出せる。  
画用紙に風船を持った垂れ目のうさぎのキャラクターを描き、少し照れたように頬を赤らめながら  
「可愛いでしょ？」  
と聞いてくる髪をピンク色に染めていた人のことを。

あの時のことなら思い出せる。

太陽が沈んだ夏の夜の公園。僕の友人は赤いブランコに揺られ、それに飽きると線香花火に火を灯す。パチパチと弾ける火花は蝉の寿命よりも早く散っていった。

僕は忘れてた、と言いつつながらポケットからバビコを取り出す。甘ったるい液体と化したそれを友人と分けっこして頬張る。溶けたのもありだよ、と無邪気に笑いあつた時のこと。

あの場所なら思い出せる。  
中学校で初めてできた友達が連れて行ってくれた秘密基地。そこはゲーム屋の倉庫だったのだけれど、ぼくたちの二番目の家だった。暗くて誰にも邪魔されない秘密の場所。この前ふと立ち寄るとゲーム屋は潰れ、倉庫は取り壊されていた。だけど今でもあの薄暗さやわくわくはすぐに思い出せる。

時間が経つにつれて僕たちは忘れていく。思い出の中の人や景色はとても綺麗で鮮明なものからモヤがかかっていき、いずれはどこかにぼんやりと溶けていく。今は今、過去は過去と割り切れるほど僕たちは強い生き物ではないのかもしれない。

「夢」

私は捨てられていた、らしい。  
中国ではよくある話だ。一人っ子政策なんてゴミのようなものを生み出した奴には心底うんざりしている。親の顔は見たことがない。私が一人目だったらな、なんて妄想はするだけ無駄に



等しい。戸籍がない私はボスに拾われた。路地裏のゴミ箱の上で泣いている赤ん坊を十五歳の今まで育ててくれたのだからボスは私の本当のお父さんだと思っっている。ボスのグループはみんな戸籍がなく、ハイハイツの集まりだ。この世界の影であり裏側に住んでいる私たちはまだ腐り切ってはなかった。私には夢があった。

「ねえ、ボス。」

ボスはブラウンシューガーを詰め込んだ葉巻を吸っていた。

「なんだ、メイ。」

「いつかはさ、ちゃんとした戸籍を手に入れてどこか遠くに住もうよ。綺麗な海やふかふかの雪を見てみたいんだ。」

ボスは少し笑い頷いた。

「他には何がしたい？」

「お腹いっぱいにご飯を食べたり、ホテルにも泊まってみたくて、飛行機にも乗ってみたい。映画館にも行って、ニューヨークの自由の女神も見てみたいな。」

「いつか全部見に行こう。戸籍もじきに手に入るさ。」

「うん、ありがとうボス。この国から早く出たいね。見たことない景色を早く見たいな。」

そのためには金がいる、とボスは言わなかった。かわりに葉巻をふかし、穏やかな目でこちらを見つめた。この人と居ることができるなら、きつとどこでも楽しいはずだ。全てが鮮やかに見えるはずだ。

夢を叶えるんだ、いつか。

古川美優歩

「こうできたらいいのに」

目を開くとまだ真夜中だった。前の通りを走る車の音も無い。この部屋で扇風機だけが微かな音を発していた。どうやらこの扇風機では、煩わしい熱気を追えなかつたようだ。

もう一度間に溶け込むため、意識を手放す準備をした。しかし一向に意識は飛び立つ様子はなかつた。

よくない傾向だ。

口の中でその言葉を溶かす。その言葉が効いたのか、精神はあらゆるところへ触手を伸ばし始める。どちらを向いても、体の中で水が揺れ続け、内側からちやぶんと叩いてきた。それは貧血にも似た感覚で、少し乾いた空気や、目蓋の裏での眼球の居場所に違和感を呈するのである。

耐え難くなつてタオルケットを蹴飛ばした。それで一瞬引いたかと思つたが、また少しづつ液を立て始めたので、観念して体を起こした。部屋の隅の加湿器を付け、テーブルの上に放つてある、ドラッグストアで安売りしていたコンタクトの保存液とケースを開けた。ちゃんと洗浄しないと、目に菌が入ると言われたつて、面倒でそんなことやつたことがない。

右の目を大きく開き、さらに左手で上下の肉を引っ張つた。そして右の人差し指を眼球の上側、目蓋のへりに人差し指を差し込む。指先に触れる滑りのある変に熱っぽい肉が、舌を彷彿とさせ、目蓋は進入物を口内に閉じ込めようと、痙攣しながら門を閉めるのだ。

目はやはり口と同じなのだろうな。

少し押し潰すようにすると、眼球の上にわずかな空間が生まれる。そこからより奥へと指を差し込むと、柔らかな肉の玉が窪みの中から三分の一ほど飛び出す。視界が狭くなりはじめ、右目から水滴が溢れレールを作る。指、手の平を伝い、肘の先で事切れた。これほど暑ければ、眼も汗をかくのだ。

眼球が裏に指が触られるくらいに出たところで、中指を入れた。裏側で二本の指が神経との接続部分を挟む。眼球と脳をつなぐコンセンクトを抜いた。世界の右半分が黒一色になつた。

接続が切れた肉の玉を一気に引き出した。爪を立てればはちきれそうな、薄い膜に包まれたそれは、手の中でどこか湿っぽい。

肉を引っ張つていた左手を離すと、穴を目蓋が覆つた。手の中の眼球を、保存液を入れたケースに入れ、キャップを閉める。左眼も同様に。何かを踏んづけないように、よたよたとベッドに戻つた。これで眠れば良いのだが。しばらくの間、人工的な風とミストを感じながら、横たわつていた。腕を組んだり、足を曲げたり伸ばしたり。

やはり駄目だ。

そう思い今度は太ももから下を外した。



---

浄火

---

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---